

福島原発事故は政府の安全宣言とは裏腹に未だに終息の気配も見せず、日夜大量の冷却水注入が続いている。膨大な費用と被曝労働という負の遺産を今後も数十年は続けなければならない。広大な面積の放射能汚染は今後も国民の内部被曝の大きな要因となり続けるだろう。放射能汚染は私たちにこれまでとは違った世界をもたらし、生き方の変革を強いている。

ゼロベクレルは不可能な世界

福島原発から放出された放射能はセシウム換算で広島原爆の168発分になる。福島県を中心に北関東全域の大地が汚染され、農作物の汚染が起こっている。程度の差こそあれ、私たち日本人は汚染した野菜や魚などを摂取せざるを得ない状況に置かれている。ゼロベクレルを求める人々もいるがそれは不可能な世界に日本は突入したのである。ちなみに2012年の福島産の米はほとんどが25Bq/Kg以下であり、政府の基準100Bq/Kgを超えるものは0.002%しかない。しかしこのことは逆に25Bq/Kg以下を我々は受け入れざるを得ないことを示している。多くの野菜や果物についても同様である。我々の食生活は「フクシマ」以前と以後とは違った世界に入ったのである。一方、このことが生産者と消費者との間に深い溝を作る原因となっている。「フクシマ」以前は目標だった「地産地消」が今では「風評被害」に取って代わられている。実は、チェルノブイリ原発事故が起こる前、日本人は体内に平均20Bqの放射性セシウムを保有していた。これは過去の核実験による大地の汚染が原因である。これは毎日0.1~0.2Bq程度のセシウムを摂取していたことを意味する。「フクシマ」によって、この値は大幅に増加するだろう。

内部被曝のリスクに関する論争

汚染食品を食べれば当然内部被曝のリスクは高まる。政府は内部被曝のリスクを外部被曝と同様、年間1ミリシーベルト以下にすべきだと云う。しかし、これは大きな問題を孕んでいる。何故なら外部被曝と違って内部被曝は直接測定できないからである。測定できるのは体内に何Bqのセシウムが存在するか、だけである。複雑な計算をもとに

体内に保有するセシウムのBqにある係数をかけてシーベルトに換算する。その結果によればセシウム137の1ミリシーベルトは体内保有量が約76000Bqに相当する。一方、ベラルーシで長い間被災者の健康診断や治療に当たったY.バンダジェフスキーはシーベルトではなく、体重Kg当たりのセシウム濃度で健康状態を判断すべきだと主張している。彼によれば、体重Kg当たり放射性セシウムが50Bqを超えれば、心臓病や脳血管障害など様々な病気につながる、という。体重50Kgの大人なら2500Bqが限界である。これは政府の主張するシーベルト主義とは全く相いれない。政府は年間1ミリシーベルトを根拠に食品基準を100Bq/Kgに決めているのである。

毎日摂取量を10Bq以下に

ゼロベクレルが不可能な世界に生きる私たち。では内部被曝のリスクを最小化するためにどれだけのセシウム摂取なら我慢できるのか。毎日1Bqずつセシウムを摂取した場合、次第に体内に蓄積されるが、飽和状態では大人の場合約140Bq、乳幼児の場合は約30Bqである。大人の体重を50Kg、乳児の体重を10Kgとすれば、どちらもKg当たり約3Bqに相当する。このことから推算すれば、毎日10Bq摂取すればKg当たり30Bqが飽和量になる。様々な汚染食品が複雑な流通を通じて日常生活に入り込んでくるが、毎日10Bq程度なら辛うじて守れるのではないか、というのが筆者の考えである。これを生産者と消費者が共通の目標として努力し、放射能による内部被曝を最小化すべきではないだろうか。勿論、こうした事態を招いた政府や電力会社の責任は厳しく問われなければならない。政府の食品基準は我々の健康を保障できない(河田)